

東京バッハ合唱団 月報

[第 662 号] 2017 年 8 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 662

August 2017

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

記念コンサートと懇親会

創立 55 周年を、歌とスピーチと料理で祝賀

1962 年 7 月 1 日、世田谷の地で呱呱の声をあげた東京バッハ合唱団が、まさにその誕生日当日に、55 歳のお祝いをしました。

今年は 7 月 1 日が土曜の練習日に当たっていましたので、荻窪教会の礼拝堂をそのままお借りして、午後 2 時より「東京バッハ合唱団・創立 55 周年記念コンサート」を、ひきつづき同会場で懇親会を開催しました。団友、後援会員、旧団員、団員のご家族・友人など、50 名ほどのお客様をお迎えすることができました。

<記念コンサート>

第 1 曲は、入団 40 年目のベテラン団員、松尾茂春氏の作詞・作曲による『キラキラ星変奏曲～主題と 24 の変奏で歌い綴るイエス・キリストの足跡～』（バージョン 1.0）からの抜粋。この日のために特別に 14 曲の変奏を選んだ編集版で、松尾氏自身の指揮により披露されました。曲名（言うまでもなく、あの有名なフランス民謡の旋律を主題とする）から、素直に思い描いて気楽に遊ぶつもりだった団員たちは、5 月の連休明けに楽譜を渡されて顔色を変えます。われわれ並の団員にとってはいずれの変奏も、なかなかの難曲『クラクラ☆』だったのです。今回は《ロ短調ミサ曲》の習得の最中であり、思うように練習に時間を割けませんでした。いずれの機会にか、まともな上演をもって、この力作『キラキラ金星』へのレスペクトを表明したいと期しているところです。

第 2 曲目は、11 月の定期演奏会に向けて、半年前の出来栄をみていただこうと、《ロ短調ミサ曲》から 7 曲を抜粋してお届けしました。Nr. 3 第 2 〈キリエ〉、Nr. 4a 〈グローリア〉、Nr. 4b 〈地に平和〉、Nr. 13 〈肉をとりて〉、Nr. 14 〈十字架に〉、Nr. 15 〈主は甦りたもう〉、Nr. 23 〈平和をわれらに〉。この組み合わせは、そのまま 8 月の野尻湖・神山教会でのコンサートでも上演されます。

両曲とも、オルガン伴奏は、この 2 月から新たに練習伴奏ピアニストに加わった小久保美希さんで、東京芸術大学音楽学部器楽科チェンバロ専攻 3 年に在学中です。お若いながら、芯の強い、豊かな音楽性をもって、日ごろの練習を支えてくださっています。

《ロ短調ミサ曲》終曲の〈平和をわれらに〉 Dona nobis pacem を、会場の皆さんといっしょに唱和してコンサートは終了しました。



▲『キラキラ星変奏曲』松尾茂春・指揮、小久保美希・オルガン伴奏（右奥）。
▼ 懇親会は、小海牧師の司会で和気あいあい、笑いが絶えない。

写真提供: いずれも松尾茂春氏



<懇親会>

会場のレイアウトを祝賀会仕様に変更して、第 2 部の懇親会が始まりました。テーブルには、参加の方々の持ちよりの料理や飲み物が並び、荻窪教会牧師でテノール団員の小海氏の司会で、来賓の方々のご挨拶やスピーチが続きました。お名前だけ留めさせていただきます。団友の森野善右衛門様と田中克彦様、後援会員の白木博也様、鈴木敬子様、稲本佑子様、藤田正記様、市川義和様、旧団員の内本越子様、菅原久光様、岡山ひかる様と東京 21 合唱団のお仲間・河野様、新入団の高校生団員・奈良昴君のご家族の皆さん。

懇親会の終わりに、マルティン・ヤーンのコーラル「イエス わが心の愉しみ」の第 16 節〈イエス わが喜

月報 8 月号 CONTENTS

- ・ 記念コンサートの感想と祝賀メッセージ … p. 2
(森野善右衛門、鈴木敬子、藤田正記、森井眞)
- ・ 要約『カントル・バッハ』連載 [4]
ブランデンブルク協奏曲 (ケーテン) (松尾茂春) … p. 2-

び) (BWV147/10) を全員で合唱。近年は新入団の方が
あると、これを歌って歓迎の意を表しています。馴染
みのコラールがすこしずつ増えてきました (K)。

アンケートにお答えいただきました

森野 善右衛門様 (団友)

たいへん熱のこもった合唱に、大きな感銘を受けま
した。特に最後に一緒に歌った「平和をわれらに」は、
これこそ「現代的信仰告白」であると思いました。大
村恵美子様のご健康を祈り、お招きを感謝します。

鈴木 敬子様 (後援会員・元団員)

久し振りに意気高いコーラスを聴かせていただき
ました。いつも思い出してなつかしんでおりました。
《キラキラ星》(松尾茂春作曲) が、バッハの衣を着て
現れたような気が致します。松尾さんはよく作曲なさ
いましたね。演奏は立派でした。若いテノール (新入
団の高校生) が頼もしいですね。音楽の内容がそのま
ま表情にはっきりとあらわれていました。

合唱が美しかった。日本語演奏、分かり易くて大変
良い。全体に、小じんまりとしていて、目が行き届い
ている。(来聴は、3回以上)

藤田 正記様 (後援会員・元団員)

《キラキラ星変奏曲》(松尾茂春作曲) は、イエス
の生涯がこの荻窪教会において再現・再臨された思い
がしました。私は、《ロ短調ミサ曲》を、「東京ライエ
ンコーア」と「東京バッハ合唱団創立 40 周年記念公演」
(2002 年 5 月) で歌いました。日本語演奏は、今日初
めてですが、メロディーを心の中で唱和しました。11
月 23 日に杉並公会堂で多くの聴衆に聴いていただく
のも意義がありますが、今日のようにミサ曲を教会で
聴くのは感動でした。

ご寄付：稲本佑子様、菅原久光様、鈴木敬子様、藤田
玲子様、古野晴子様、森井眞 様

東京
バッハ
合唱団
御中

二〇一七・七・一
おめでとうございます！
全人類最大の宝の一つ、バッハの歌
を歌いつづけ、広く世の人々にその豊か
な富を分かちつづけ、ご苦労もあつたで
しょうけれど、心からバッハを楽しみつ
づけて 55 年！
たとえようもない素晴らしい快挙！
これからも、大指揮者大村恵美子先生と
ともに、永くバッハを歌いつづけ、楽し
みつけてください。

昔歌ったバッハの感慨を
今も忘れぬ旧合唱団員

森井眞

要約『カントル・バッハ』 連載 [4]

マニーフィカト (わが魂は主をあがめ)

ポール・デュ・ブシェ [著]

大村 恵美子 [訳]

要約・紹介：松尾 茂春 (団員)

<内容>

第 1 章：ルターのもとでのヨーハン・セバスティアン
(マルティン・ルター、先祖たち、誕生～リューネブルク時代)

……連載 [1]、月報 653 号 (2016 年 11 月号)

第 2 章：修業時代 (アルンシュタット、ミュールハウゼン)

……連載 [2]、月報 655 号 (2017 年 3 月号)

第 3 章：偉大なオルガニスト (ヴァイマル)

……連載 [3]、月報 660 号 (2017 年 6 月号)

◆第 4 章：ブランデンブルク協奏曲 (ケーテン)

……連載 [4] (今回)

第 5 章：カントル・バッハ (ライプツィヒ)

第 6 章：音楽の献げもの (フリードリヒ大王の客人、歿後)

第 4 章

ブランデンブルク協奏曲 (ケーテン)

1718 年 11 月 15 日、バッハの第 7 子の受洗に際し、
代父・代母として集った顔ぶれはレーオポルト侯の家
族の 3 人と、身分の高い貴族の 2 人でした。このこと
に示されるように、セバスティアンは恵まれた状況に
あり、カペルマイスターという称号、年額 400 ターラ
ーという宮廷長に等しい待遇を受けていました。

バッハが着任した頃、ザクセンの小都市ケーテンの
人口は 5000 人を数え、1603 年以来、アンハルト公国
の分割によって生まれた小さな侯国の本拠地でした。
広く美しい均衡をなした城は大きな中庭を備え、見事
なフランス式庭園にとりかこまれていました。

侯国内ではカルヴァン主義が活発でしたが、アンハ
ルト＝ケーテン侯レーオポルトの母ギゼラ・アグネ
ス・フォン・ラートのルター主義信仰がそれを緩和し
ていました。

バッハは公式にはカペルマイスター(“礼拝堂楽長”)
でしたが、実際には典礼の義務を免れていました。ケ
ーテンの宮廷はカルヴァン派であり、それは音楽を宗
教行事と密には関わらせない敬虔主義の流れに近いも
のだったためです。

レーオポルト侯は、臣民それぞれの選択による宗教
の信奉を禁じない、開明的な人間でした。それでなけ
ればバッハがケーテンに来ることもなかったでしょう。
そのバッハが指揮する合奏団は「コレギウム・ムジクム」
という世俗的な名称のものでした。そのメンバーは 8
人の独奏者 (ヴァイオリン 2、チェロ 1、ヴィオラ・ダ・

ガンバ1、オーボエ1、ファゴット1、フルート2)と、7人の補強の奏者、写譜担当2。そしてセバスティアン自身もヴィオラ声部を受け持ちました。

・ケーテンでは、雰囲気はまったく音楽的

アンハルトのレーオポルトは彼のカペルマイスターに強い関心をよせ、提供された新しい可能性に刺激されバッハは盛んに作曲します——室内オーケストラのためには序曲、協奏曲など、身内の者や弟子たちのためにはソナタ、組曲、パルティータなどのチェンバロ作品。一方では輝かしく専門的な「宮廷音楽」Hofmusikが、他方では「家庭音楽」Hausmusikがバッハの純理的な思考と家庭での団欒との果実として生み出されました。

残念なことに、この時期の作品の大半は失われてしまいました。現存する作品——《平均律クラヴィーア曲集》、《クラヴィーア小曲集》、《ブランデンブルク協奏曲》、《管弦楽組曲》、ヴァイオリンとチェンバロ、ヴィオラ・ダ・ガンバとチェンバロ、フルートとチェンバロのための《ソナタ》、《ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》、《チェロ組曲》等——はこの時代の驚異的な多作性を示しています。

・世俗的な音楽の宮廷に仕える、深く宗教的な音楽家 バッハ

典礼の場をつかさどり、規定に従っているだけでは、その音楽が「宗教的」だとは言えません。元来、音楽の形容詞ではなかった「宗教的」religieuxに代えて、「聖なる」sacré音楽——神に捧げるために人間が個人的な用途からのがれさせた音楽——について語る時、バッハはこの意識に強くこだわっていたといえます。彼にとって音楽というものは、それが世俗的であっても宗教的であっても、その本質自体において信仰の宇宙に属しているのです。ケーテンでの音楽的特権とその逆説は、この光に照らして理解するべきでしょう。

バッハにとって、オルガンこそが神に栄光を帰するにふさわしい“楽器の王”であったという観点から見れば、そのオルガンに携わらない職務を選択したことは一つの逆説といえましょう。また、作曲においても逆説をとっています。たとえば対位法書法に適したオルガンでなく、モノディー的な楽器——すなわち、基本は1声部の楽器であるヴァイオリンやチェロのための最高級の無伴奏作品は、あたかもポリフォニー的な楽器のための作品のように書かれています。

・ケーテンの日々は幸福だ、とすべてが信じさせている

新しい職務による音楽的充足に加え、セバスティアンにとっては、音楽の才にも恵まれた子供たちが満足の深い源泉になりました。いかめしく控えめなバッハのイメージにはほど遠く、子供たちに囲まれた自室のまん中で、赤ん坊をひぎに、往来する訪問客のあいまに、仕事をしているバッハ。生活のめまぐるしさは、むしろ彼に豊潤をもたらしたのです。彼が好んで行った遊びの一つは、子供たちと一緒にチェンバロに向かって、一人一人がちがった調べでいっせいに演奏することでした。家庭的伝統から、音楽の団欒は、この「ク



■新しい職務による音楽的充足に加え、セバスティアンにとっては、音楽の才にも恵まれた子供たちが満足の深い源泉になりました。……

「バッハと3人の息子」B. デナー、1730作とされる油彩画（個人蔵）。上の二人ヴィルヘルム・フリーデマン（右）とカール・フィリップ・エマーヌエル（中央）は、フォルケルによれば「幼少の初期から、父親の家での良い音楽を聴く機会」をもっていたわけである。

オドリベット」quodlibet（多声部の即興歌）で幕を閉じたものでした。

子供たちの中で、最も才能に恵まれていたのは長男のフリーデマンで、バッハは彼の音楽教育にとりわけ配慮しました。《クラヴィーア小曲集》を作曲したのも彼のためでした。

・《クラヴィーア小曲集》

この作品の一部はバッハ自身、一部は息子によって書かれ、初心者への手引書として始まります。最初に音名と音部記号の説明が書かれ（フリーデマンが4オクターヴの音域と7種以上の音部記号に馴染んでいたことと符合）、適用例を添えた親指の使い方、装飾音の奏法と続きます。つづくページには“小さな音楽家”の能力を十分想像させるフリーデマン自身の作品に加え、《平均律クラヴィーア曲集の前奏曲》、《2声のインヴェンション》、《3声のシンフォニア》が取り入れられています。

バッハはケーテン時代を通して重要なものとなった一形式、舞踏組曲を紹介しています。1720年から1724年にかけて、後に《フランス組曲》、《イギリス組曲》として知られるようになる作品群を完成させます。

バッハの作曲教育は、器楽実習での指の訓練に比べれば、より潤いのあるものでした。和音の初歩的な連結方法を教えると、すぐに、まるで水中に突き落とすようにして、正確な対位法による曲づくりを求めます。そこでは内面を聴くことを発達させるために、鍵盤にたよることなく“机の上で”作曲させるのが常でした。「何人かの人物が、会話をとり交わしているのを想像してごらん」というのが彼の口癖でした。どの声も、それぞれ固有の色調と個性を持っていながら、会話の主題は共通なのです。

・衝撃

豊穡で幸運なケーテンの地で、音楽と家族の幸福の、末永い生活の樹を植えようと夢見ていたバッハ——し

かし1720年6月、ボヘミアのカールスバートに湯治に行く侯のお供をして1月後に戻ると、その間にマリーア・バルバラは急死し、10日前にすでに埋葬されていました。取り残されたのは4人の子供たち——12歳の長女カタリーナ・ドロテア、10歳のヴィルヘルム・フリーデマン、6歳のカール・フィーリップ・エマヌエル、5歳のゴットフリート・ベルンハルトでした。死を神の摂理ととらえ、死に直面することに慣れていたとしても、これは恐ろしい苦痛であったことでしょう。その時、教会音楽への郷愁に駆られたのは一つの巡りあわせだったのか——いずれにせよ、彼はオルガニストへの復帰を考えるようになりました。

バッハはハンブルクのヤコブ教会を採用試験候補者として訪れ、1720年11月21日、崇敬する老ラインケンの前でコラール《バビロンの流れのほとり》に基づく即興演奏をしました。その豪華な和音の構造物、滝のように繰り出される16分音符による長時間の演奏を聴いたラインケンは「この技法はもう死に絶えたと思っていた。でもそれがあなたの中に生きているのを見ました」と言いながらバッハの手をとりました。しかしながら、当時残っていた慣習——寄付を多くするものに地位が与えられる——のため、バッハはその渴望する地位を得ることができず、落胆して引き上げます。この教会の牧師であり、バッハによって多数作曲されたカンタータの歌詞作者であるエールトマン・ノイマイスターは「もし天使がこの教会のオルガニストになろうとして天から下り、神々しく演奏したとしても、お金を持たずに現れたなら、ハンブルクでは受け入れられず、空しく天に飛び去るほかはないだろう」と反対意見を表明しますが、地位を得たのは4000マルクを寄付した凡庸なオルガニスト、J・ヨアヒム・ハイトマンでした。

・《ブランデンブルク協奏曲》

妻の死後、バッハは仕事に没頭し、1721年冬の終わりに、《ブランデンブルク協奏曲》に最後の手をつけます。ブランデンブルク辺境伯クリスティアン・ルートヴィヒに捧げられ、3月24日に送られたこの作品は複数の器楽奏者のための協奏曲です。形式、器楽的效果、様式の多様性にもかかわらず、一つの真の円環として考案された《ブランデンブルク協奏曲》は、協奏曲というジャンルに開かれている可能性についての、一種の辞典を形作っています。イタリアの様式、フランス趣味、ドイツ風の威厳、ポリフォニーとホモフォニー、舞踏の動きと対位法的構造、それらが輝かしく交代します。おそらくケーテン宮廷の器楽ヴィルトゥオーゾたちによって演奏されたと思われるこの曲を、献呈先であるブランデンブルク辺境伯は一度も演奏することがありませんでした。

・鍵盤楽器のための最高の文献、《平均律クラヴィーア小曲集》

1722年の冬にバッハが労した《平均律クラヴィーア曲集》には、もっと以前に作られた何曲かも入っています。24の調性による前奏曲とフーガの対の集合体で、調性は音階の上行の順に進行します。[“平均律”とい

う] 目新しい題名は、この世紀をめぐって発展した音律の体系からヒントを得たものですが、バッハがそれを最初に享受したわけではありません。しかし、バッハが提示したものは“平均律”の領域で先駆者たちが到達したものを、あらゆる面で超えているのです。自筆譜の巻頭言に「良く調律された[平均律]クラヴィーア、またはすべての全音と半音における前奏曲とフーガ、両者とも長3度〈ド、レ、ミ〉および短3度〈レ、ミ、ファ〉による。習得を願う若い音楽家たちの実践と利益のために、またすでにこの技法に習熟している人々の楽しみのために」と書かれたこの作品は、称賛を受け、後の1740年から1744年にかけて同じ原理による第2巻を追加することになります。

・アンナ・マグダレーナ、20歳で「非常に美しいソプラノ」

妻を亡くし、年ゆかぬ子どもたちのいるゼバスティアンは、宮廷トランペット奏者の娘、アンナ・マグダレーナ・ヴィルケを新しい妻として迎え、1721年12月にその婚礼が行われました。このごく若い女性にとって、最年長で13歳となる4人の子供たちとの関係を引き受けることを含め、その荷は大変重いものでしたが、アンナ・マグダレーナはゼバスティアンにとって誠にふさわしい妻となりました。彼女について知られていることはほとんどなく、肖像画も失われてしまいました。しかし、彼女はなんのもめごととも引き起こすことのない穏和さ、ゼバスティアンが言うように「非常に美しいソプラノ」の歌声をもち、客人を暖かく家庭的にもてなしました。愛情深く、とても音楽的な心の持ち主であるこの女性は、生涯を通じて夫の真の協働者となって、身に降りかかる他の様々な仕事をものともせず、ろうそくの明かりのもとで彼の音楽を写譜しながら長い夜を過ごすのでした。

・音楽はケーテンで寵を失う

彼らの結婚後まもなく、レーオポルト侯がアンハルト＝ベルンブルクの侯女と結婚します。ところがこの女性、フリーデリカ・ヘンリエッタは「退屈な人(ナイトキャップ)」「音楽不感症」、つまり音楽や文化一般に無関心な人でした。音楽に夢中だった侯の日常から音楽は次第に遠ざけられ、レーオポルトのカペルマイスターへの態度も変わっていきました。このことに加え、息子たちに大学教育を受けさせたいという思い、また神聖な *sacré* 音楽を再び作曲したいとの意思も明らかになって来たことで、一時はここで生涯を終えることも考えたこの小さな宮廷を、今や去りゆく決心が促され、どこかの都市でカペルマイスターの役職を得る必要が生じて来たのでした。

[1983年8月に行われた東京バッハ合唱団第1回ヨーロッパ演奏旅行の途中、短時間でしたがケーテンの町を訪れました。静かな郊外の町との印象が記憶の片隅にあります。]

[つづく]

連載第1回から3回のバックナンバーは、HPでご覧いただけます。
⇒ http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm